

雜載

〔倭訓栞中編二十八〕よはもとしのび。 諺にいへり、世は故忍の義なり、人の世にある何事によらず、むかしを思ふ意なり、新古今集に、

行末は我をもしのぶ人やあらんむかしをおもふ心ならひに

〔源氏物語桐壺〕物思ひしり給ふは、さまかたちなどのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすくにくみがたかりし事など、いまぞおぼしいづる、さまあしき御もてなしゆへこそ、すげなうそねみ給しが、人がらのあはれになさけありし御心を、うへの女房なども戀しのびあへり、なくてぞとは、かゝるおりにやとみたり、

〔河海抄桐壺〕なくてぞとは、かゝるおりにやと、

ある時はありのすさびにくかりきなくてぞ人は戀しかりける

〔枕草子二〕すぎにしかたこひしきもの

かれたるあふひ ひいなあそびのてうど ふたあゑ、ゑびぞめなどのさいでのをしへされて、さうしのなかにありけるを見つけたる、又おりからあはれなりし人の文、雨などのふりて、つれづれなる日、さがし出たる、こそのかはほり 月のあかき夜

〔徒然草上〕しづかに思へば、よろづに過にしかたの戀しさのみぞせんかたなき、人しづまりて後、ながき夜のすさびに、なにとなきぐそくとりした、め、のこしをかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、ゑかきすさびたる、見出たるこそ、たゞ其おりのこゝちすれ、此比ある人の文だに、久しくなりて、いかなるおり、いつの年なりけんとおもふは、哀れなるぞかし、手なれしぐそくなども、心もなくてかはらすひさしき、いとかなし、○中略

〔萬葉集一雜歌〕高市古人感傷近江舊堵作歌
古入爾和禮有哉樂浪乃故京乎見者悲寸